

初代イクメン、消費者行政でも、前例を創る

『経産省の山田課長補佐、ただいま育休中』著者 山田正人さん

2020.11.18

○ゆき きょうも、すばらしいゲストをお招きすることができました。「ナントカザンギョウショウ、ただいま育休中の」山田課長補佐」の著者です。

○山田 通常残業省(笑い)。

○ゆき かつて通常残業省と言われるくらい仕事が毎日遅くなる通商産業省。その課長補佐が1年も育休を取るなんて、ありえない話と、大騒ぎになりベストセラーになりました。今はと安くて小さい本が出ているのですよね？

○山田 文庫本が出たのですけれど、文庫本も幸いはけまして、今は電子です。文春文庫の電子版です。

○ゆき 電子版だけになってしまったのですか？

○山田 ええ、そうです。

○ゆき あら、まあ。とてもおもしろい本です。その中のおもしろい部分も、きょうは話していただきます。

○山田 Amazon だと中古が1円で買えますので。

○ゆき まあ。

今回この講座には2度目のご登壇ですので、後半では、国家公務員が、「前例を超え、前例をつくるための十カ条」みたいなことを話していただけることになっています。

実は、正人さんは、娘の高校の友達のお婿さんという、そういう関係でございます。

波乱万丈で、でも、とても筋の通った話を聞いていただけたと思います。では、1円でぜひ Amazon で買っていただくことをおすすめして、これからよろしく願います。15 分ぐらい質問時間を残していただけますよう、よろしく願います。

○山田 わかりました。山田と申します、きょうはよろしく願います。座ってお話しさせていただきます。

それでは、お話しする前に、自己紹介をまずしたいと思います。大学を卒業して通産省に入りまして、アメリカにも留学をさせていただきました。諸先輩方も当然そうだと思うのですが、正直、若い頃はずっと激務でした。

どのくらい激務だったかという、終電で帰れると小躍りして喜ぶという…。そういう感じでした。基本は、暗いうちに家に帰りたいなど。大体、4時とか5時ぐらいになると夜が白んでくるのです。3時だと大体暗いので、3時だと大丈夫。大丈夫というか、健康は保てるのかな：という感じだったのです。4時～5時になって明るくなるともうげんなりという感じで、課長補佐の途中ぐらいまでは本当にずっと激務でした。

当時、若い課長補佐は当然激務なのですが、無制限・無定量で働くということが今よりも国家公務員に当たり前のよう求められていた時代でした。国会がある日なんかは、当然家に帰る時間をもたないで、役所で1時間でも空いたらその1時間は寝るということなのですが、1時間後に大臣レクがあるから起きなければいけないので、ソファで寝るとグーツと眠りが深くなるので起きられない。なので、こういう会議卓みたいな硬い所の上で寝るのです。これだとゴツゴツして背中とかが痛いから、そんなに深く眠れないので、例えば6時に寝て7時に起きるとか、そういうことはできるので、会議卓でよく寝ていました。

きょうは、育児休業以外にも、公開の場でしゃべれることに限定して、なるべくたくさんしゃべってくださいというユキさんのリクエストで…。

2003年から2004年に原子力政策課というところに行きました。当時は六ヶ所村の核燃料サイクルが、「ホット試験」と言ってプルトニウムを使って試験をする直前の段階で、それを動かすかどうかという議論をしていたタイミングでした。当時のことをあまり外でしゃべっていないのですが、当時は電力会社の中にも、経済産業省の中にも、核燃料サイクルは動かさないほうがいいのかという意見もあった中で、難しい調整をしていたわけです。私自身、「これは19兆円もかかる」には政策的な効果がないので、止めるべきではないか」という考えに立って、とめるための努力を少ししたのです。

結果的には、電力会社は「経済産業省にとめてほしい」と言い、経済産業省は「電力の側がとめるという判断をしたら、自分たちはとめてもいい」ということで、最後までババ抜きが続いて、お互い降りることができなくて…。そうこうしているうちに、安全保障の観点から原子力推進にこだわりのある先生とかも当然いらっしやるので、原子力政策として核燃料サイクルをとめることができなくて、ホット試験というプルトニウムを使った試験が始まってしまったわけです。

役所というのはおもしろいもので、とめるという議論をやれやれと応援する人たちは、議論がうまくいっている間はみんなやれやれと言うのですが、いざそれが戦いに敗れて挫折したということになると、みんな背を向けて、自分たちは全く無関係ですというふうになるのです。そのときに私は、初めて世の中の厳しさを知ったということではあるのですが、若い課長補佐として、そのときに最初の挫折があったということです。

先ほどユキさんが紹介してくださった本には美しい話しか書いていないのですが、このときの挫折も一つの大きなきっかけになって、1年間の育児休業を取ったということです。仕事で挫折してやっぱちで育児休業を取ったというように聞こえてしまうかもしれませんが、そういう側面がゼロだったわけではないのですが、いざ育児休業を取ってみたら、私が知らなかった物すごくすばらしい世界が広がっていたので、それはぜひ御紹介するべきだと思います。きょう詳しくお話をします。

それで育児休業を取りまして、その後、育児休業を取ったという本を書いたおかげで、新聞とかテレビにも取り上げていただくとか、いろいろ NPO 活動なんかに誘われるようになって、ユキさんともちょうどそのときに知り合いました。そういう活動の積み重ねの中で、2009年に林文子さんが横浜市の市長になります。これは、民主党が政権を取ったのと同じ日の市長選で林文子さんが市長になられて、私は育児の関係の NPO 活動で林さんとは会議室でイスを並べていた仲だったので、「副市長に来て、待機児童対策を手伝ってください」と頼まれました。育児の経験があるということで、ある種、人寄せパンダ的な人事だったのかもしれませんが、そういうことで横浜市の副市長をやらせていただきました。役人人生としては多分ここがピークで、そこから先は冴えないわけですが、そういう貴重な経験をやらせていただきました。

その後、2014年から2015年に消費者庁に行きまして、ここで職業上2番目の挫折がありました。あとで御紹介しますが、ここでもまた政治との関係で非常ににらまれるようなことが起きて、それで、ここもまた左遷されるということで、2番目の挫折の消費者庁というのがあります。これはまたあとで御紹介します。

その後、うだつが上がらない人生を送っていたわけですが、ユキさんから授業のお誘いを受けたときには、私は前職の中小機構という独法の理事をやっていました。仕事をやりたくてもやりすぎると、部下との関係でやはり大変になってしまうので、マネジメントの関係から、それほど負荷は上げられないというポストだったわけです。

2020年の10月から、内閣府の河野規制改革・行政改革担当大臣の直轄チームに呼ばれて、ここで参事官として主にエネルギーの担当をするということで、3週間前に行きまして働き始めているということです。エネルギー政策の規制改革をやるということなので呼ばれて、着任してやっているということです。私からしてみると、原子力政策課、消費者庁に加えて、今回3番目の戦いなので、三度目の正直で勝たなければいけないという思いでやっております。以上が自己紹介です。

きょうお話しさせていただく内容は、やはり育児休業の話を中心にさせてください。父親の育児休業の経験をお話します。それから、その後、周囲や世の中はどう変わっていったのかということもお話します。最後に、そうした行政での挫折ということをお話しし、そのあとに、先ほどユキさんからお話のありました、国家公務員として生きていく上での目線というものも、私なりに感じていることをお話ししたいと思います。

まず、育児休業を取得したきっかけです。すいません、ここから先のスライドは、職業上の挫折と関係ないスライドなので、美しい話しか書いていません。

2004年の11月から2005年の10月末まで1年間、育児休業を取りました。私どもにとっては3番目の子供の育児休業で、上に当時2歳の男女の双子がいました。上の双子のときには当然のように妻が育児休業を取りまして、家の中で夫婦のどちらが取るというような議論もなかったわけですが、今度は3番目の子供ということで、3番目の子供であれば妻ではなくて私が取るかという議論になったわけです。

と申しますのは、私たち夫婦は、同じ年に同じ大学の同じ学部を卒業して、同じ役所に同期で入ったという間柄で、少なくとも子供が生まれるまでは、夫婦の間で、同期ですから仕事も対等にやり、当然家事も対等にやるという、そういう関係性であったわけです。そういう中で、2年前に男女の双子で妻が育児休業を取って、当然のことながら育児べったりだったわけです。3番目の子供の妊娠がわか

ったときには、妻は育児休業から復帰はしていましたが、妻のほうにかなり負担が寄っていたというのが正直なところでした。そういうときに、私も心の中では妻に申しわけないと思っていたわけです。それまで対等にやっていたのに、いきなり妻の負荷が育児にかかってしまっていたので、申しわけないと思っていたのです。

当時、私は原子力政策の見直しと言ってやっていたので、朝から晩まで働いていて。何か、仕事はとにかく完璧にやらなければいけないという、ある種そういうマインドコントロールに置かれていて、仕事は完璧にやって、余力があれば育児・家事をやらなければと、そういう頭のマインドセットだったのです。

それで、家に帰るのは夜中の3時～4時だったということで、3時～4時に家に帰ると、洗い場には食器が山盛りになって置かれている。「あっ、これは山田、おまえがやれということなんだ」と思って、夜中の3時から皿を洗っていましたが、なかなか子供を風呂に入れるとか、そういう直接的なことはできません。妻は妻で、何かをやりかけていたのだろうけれど、ソファで行き倒れたようになって眠っているという、そんな感じだったので、とても私は同じ負担をやっていたというわけではなかったのです。そういう中で、3番目の子供の妊娠がわかったということです。

3番目の子供の妊娠がわかったときに、私自身は、「やった、やった。また新しい命が生まれてすばらしい」と言って喜んでいたのですけれど、妻は物すごく深刻な顔をして、「う～ん」と…。これを本に書くと、子供がそれを読んでショックを受けてはいけなから本には書いていないのですけれど、妻が何と言ったかといったら、「う～ん、私は産めない」と、妻はそう言ったのです。「えっ、私は産めないってどういうこと？ 貴重な命なのに」と僕は思ったわけですが、妻の側からしてみると、夫がこのまま仕事ばかりやっていて、自分は双子の育児休業から復帰して、育児と職場を両立させていて、さらにこの3番目の子供の妊娠まで…。それを一人でやるのは無理だ、不可能だと思っただけで、「もう私は産めない」と、妻は言いました。

そのとき、私は本当に衝撃で、自分がどんなにエネルギー政策の見直しとか何かをやっている、自分の3番目の子供の命すら守れないような、そんな正義もないだろうと思ひまして、それなら私が育児休業を取ろうと決めまして、育児休業を取りました。

当時、妻は育児休業明けだったので、重要な仕事というか、あまり出力の大きいところには配属できなかったのです。彼女は何をやっていたかという、「世界平和研究所」というところで、中曽根元総理と一緒に日本憲法の改正草案というものをつくっていました。もともとタカ派の中曽根さんなのですが、うまく中曽根総理と相談して、24条とかも彼女なりに正しいと思う表現にしたりに成功しました。

当時、読売新聞も日本国憲法改正草案をつくられていて、世の中は少し盛り上がった時期で、それはそれで、元総理と二人で仕事をするということは大変重要な仕事だったので、彼女はそれをやりたいという気持ちはあったわけです。そういうこともいろいろありまして、私が育児休業を取ることに決めました。

それから、「子育てはお母さんにしかできないの？」と、一種の社会実験と書きましたけれど、私は育児休業を取ったぐらいですから、もともと子供好きだったので。ですから、「子育てはお母さんにしかできない」という人がいっぱい周りにいたわけですが、本当にそうなのかと…。100%お父さんがやったら、お父さんでもできるのではないのと。それを実証した人はいないだろうと思ひまして、一種の社会実験として100%お父さんがやったら、ちゃんとできるのかどうかを確かめてみたいと、そういう気持ちもあったわけです。これらのことが複合して、育児休業を取ると決めたとのことです。

決断したときの周囲の反応ですけれど、妻は、「ああ、その手があったか」というのが第一反応でした。「それなら産める」ということで、安心して産んでくれまして、本当に妻には感謝しています。一番驚いたのは子供の反応で、当時2歳の双子で、私には全然なついていなかったのですけれど、私が育児休業を取ると決めたその日の夜から、娘は私と一緒に寝てくれるようになったのです。なので、自分の父親がこれから1年間自分たちを優先してくれるのか、仕事ばかり相変わらずやるのかという、その心のギアチェンジを、2歳児とはいえ物すごく鋭敏に察知するのだということは、非常に驚いたことです。

あと、私の実の両親です。私の実の両親は、リベラルだったのか何なのかわかりませんが、「ああ、育児休業を取るならいいじゃないか、いいじゃないか」という感じで、割と受け入れてくれました。でも、これは少し裏話もあって、先ほど申し上げたように、私はその前に原子力政策課で左遷されて挫折していて、結構そのころ役所をやめたいなんて言っていたこともあったので、「やめるぐらいなら、1年頭を冷やせ」と、そういう思いがあったのかもしれませんが。

実の両親は理解があったのですけれど、妻の両親は非常に私の育児休業をいぶかしがりました。妻の父親は今91歳になりまして、そういう意味では非常に昔ながらの人なので、ある種しょうがなかったのですけれど、「正人君は、どうしてそんな変なことをするんだ？」というのが反応だったということ、あとになって私は妻から聞きました。当時、私と妻は結婚して10年ぐらい経っていたのですけれど、お互いの実家のことを持ち込んでもろくなことがないという経験則から、鉄のカーテンのルールを設けていました。お互いの実家で言っていることは絶対に相手には伝えない。それが家族円満の秘訣だと。そういう夫婦のルールがあったので、私はそれをその当時間かされることはなかったのですけれど、妻の父親は妻に、「どうしてそんな変なことをするんだ？」ということ、相当言っていたということ、これはあとになって聞きました。

何であとになって聞けたかということ、先ほどユキさんが紹介してくれた本がありまして、ゲラができ上がったときに、妻の父親も少し出てくるので、「ちょっとこういうところに出てきますから」と言って妻の父親に見せたのです。そのとき妻の父親がこのゲラを読んで、「ああ、正人君はこういう1年間を過ごしたんだ」と言って理解してくれて、そのとき初めて私のことを許してくれたわけです。そのとき私は初めて、それまで許されていなかったことを知ったということです。今では、私たち夫婦の子育ての最大の理解者になってくれましたけれど、理解するには1年間ぐらいの時間が必要だったということです。

あと、職場の上司です。当時、私はサービス政策課というところに勤めていましたけれど、サービス政策課長の上司は——正直、これも本に書けないと思ったので書いていないのですけれど——私の育児休業には、一言で言うと非常に否定的だったということです。

私は育児休業を取ろうと思って、上司には、「3番目の子供が生まれるから、今度は私が取ろうと思っています」とか、そういうことを折に触れて伝えていたのですけれど、実際、出産前に「育児休業申請書」というものを書いて、課長に、「これ、前々から申し上げていた件ですけれど、やはり取ることにしました」と渡したら、それまで取ろうと思いついてか言っていたときには、「あつ、いいんじゃない。それも一つの考えだよ」とか言っていたのですけれど、いざ実際に私が1年間の育児休業の紙を書いて、「課長、これ前々からお話ししていた件ですけれど」と渡したら、「はあ？」と言うのです。「はあ？ 山田くん、あれだけしつこく何回も言っていたから、もしかしたらこいつ本当に取るのかなと思っていたけれど、まさか1年だとは思わなかったよ」というのが彼のセリフでした。

これは私にとっては大変意外なセリフでした。当時、サービス政策課には1年間の育児休業を明け

て復帰している女性もいて、私の職場は恵まれているのかもしれませんが、女性であればほぼ1年間取るのが相場の職場なのに、男性の私が育児休業を取ると言ったら、彼の頭の中では「1年はないだろう」と。当時彼が言ったのは、「1カ月か2カ月だと思ったよ」というのが彼のセリフですけど、女性であれば1年が当たり前だと思っているのに、どうして男性だと1カ月か2カ月のはずだと頭の中で自動変換されるのかというのが、最後までわかりませんでした。

子供の出産予定日は10月18日だったのですが、別に1カ月や2カ月经っても保育園があいているわけでもなんでもないわけです。だから、課長が言うから1カ月や2カ月にしたところで、預かってくれる人がいるわけでもないし、まさか職場に子供を連れて来て課長が見てくれるわけでもないとする、これは非常に無責任な言論だと思ひまして、職場の上司にはそういう感じで言われましたけれど、そこはやり過ぎました。

ただ、職場の上司は課長もいるけれど、その上に局長がいて、局長に説明しに行くと、「ああ、ようやくそういう時代になったのか」ということで、局長は快く許してくれましたし、人事に秘書課というところがあるのですけれど、秘書課の人も、「それは当然のことではないか」ということで——もしかすると、妻が働いたほうが、私が働くよりいいと思ったのかもしれませんが（笑い）——直属の上司は理解してくれなかったけれど、とにかくその上の人たちは許してくれたと。

あと、職場の同僚です。職場の同僚は、私の仕事を引き継いでくれた人たちは、非常に快く受け入れてくれました。「山田さんのところは夫婦共稼ぎで、3番目の子供なら山田さんが取るのは当たり前かもしれませんね」とか、「僕たちもいずれ取るかもしれないから、お互いさまです」と言って快く引き受けてくれた人がいました。これは本当に職場の同僚に感謝しています。

友人とか知人と書きましたけれど、職場を離れた友人とか知人で一番多かった反応は、「山田、出世はあきらめたのか？」と言う人はいました。そのときに、私はちょっとにぶいところがあって、「育児休業を取っても、そのあと戻ってきちんとしたアウトプットを以前と同じように出せば、それは同じように評価されるはずだ」と思っていたのですけれど、あまりに多くの人に、「育児休業を取ったから、もうおまえは出世アウトだな」と言われて気がついたのですけれど、日本の多くの組織では、育児休業を取ること自体が組織に対する反逆行為で、それを取っただけで出世はアウトという、そういう組織が当時はまだ多かったのだと思ひました。私も少し鈍感なところがあって、経産省というところもそういう側面がゼロなわけではないと思ひますけれど、いずれにしろ、私は育児休業を取ったということです。

あと、私の友人・知人は男性が多いわけですけど、多かった反応は、「山田は産んでもいないのに、どうして産休が取れるんだ？」と。要は、男性の側から見たら産休と育児休業は連続して取るから、両者の区別もついていないわけなのです。ですから、「どうして産んでもいないのに産休が取れるんだ」と、そういう人も多かったです。

このように、クチャクチャ、クチャクチャ言う人はいっぱいいたわけですけど、私たち夫婦は何をよりどころにして判断したかという、それは、自分たちは社会に対して職業人として責任は負っているけれど、それと同様に自分たちの子供に対しても親としての責任を持っている。いろいろな夫婦がいるから、別に私も日本国中の男性がみんな育児休業を取ればいいとも思ひませんが、夫婦それぞれが役割分担をして、どちらがやってもいい。最終的に、子供に対してきちんと責任を果たす。その果たし方は、夫婦100組あれば100様あるのだということで、私たち夫婦は、「3番目の子供は私が育児休業を取る」という選択をしたということです。

それで、実際に男性が育児休業を始めてみると、どうだったかということですが、率直に言って育児は、物すごく、びっくりするほど大変でした。私は、それまで双子の育児とかも、仕事ばかりやっていたるくにやっていたので、本当に育児が大変だとは知らなかったのです。やり始めると、物すごく大変で…。私は職業人として難しい法律とかも書いたりしていたので、「おれはこんなに難しい法律が書けるんだし、子育てはどんな動物でもやっているのだから、絶対できないわけがない」と思っていたのです。けれど、やってみると、自分は職業人としては当時 15 年ぐらい働いていたので 15 年選手で、職業としての脳は開発されていても、育児に関してはゼロ年生だということで、自分自身に育児の能力が全くないということ、やり始めた瞬間に気づきました。

本当に体力・筋力という点からまず大変で、男性の私が育児をやれば、体力・筋力で大変なことはないだろうと思込んでいたのですけれども、ずっと赤ちゃんを抱っこしていると、手が腱鞘炎になるのです。痛くて、痛くて、整形外科で注射を打って治してもらいました。そのぐらい、ずっと抱っこをすると手にきますし、テレビのリモコンも持てないぐらい痛くなります。

それから、私の子供はよく風呂で溺れたのです。3 人もお風呂に入れると順番にしなければいけないので、洗い場で洗っている間に浴槽に入っている子がツルツとすべったりして。そのとき、バツと飛び上がってつかんで上げるとか、そういう瞬発力とか…。本当に 1 日クタクタになりまして、男性の私でもこんなに大変なのに、女性ならもっと大変だろうとも思いました。

それから睡眠です。新生児は 2～3 時間おきにミルクをほしがるので、あげなければいけないのですが、当然、夜中のミルクも、育児休業を取っている以上、私があげることになるわけです。カミさんは当時、職場復帰していましたので、「悪いわねえ」とか言いながらガーガー寝ていて、全く起きやしないのです。「しょうがない、この人はあした仕事があるから」と思って、私は毎晩、夜中に何度も起きてミルクをあげていました。やっぱり睡眠が小刻みになると、平日の昼間も頭の芯ににぶい痛みが残ってずっと取れない。コーヒーなんかを何杯飲んでもとれないというぐらい、物すごくつらい感じになりました。

それから、「想定外の惨事がある」と書きましたけれど、赤ちゃんというのは言葉でしゃべれないので、なかなかびっくりするようなことが起きるのです。例えば、天気の良い日に赤ちゃんを抱っこひもで括りつけて、お散歩に行ったりするとします。「きょうは天気もいいし、久しぶりに遠出しようかな」と、30 分ぐらい家から歩いて行った先の公園で、それまでケラケラケラケラ笑っていた赤ちゃんが、急にハアアアとゲロを吐くわけです。私は歩いているのでゲロがバアアと全身につくわけです。全身ゲロまみれだとタクシーにも乗れないしバスにも乗れないから、結局ゲロまみれでまた 30 分歩いて帰るのですが、赤ちゃんに対して、「おまえ、ゲロ吐くときは言ってくれよ」と言っても、それは当然通じないわけです。

職場で、ゼロ年生とか 1 年生とかの新人の社員が、変なところに FAX を送るとか、いろいろミスはしますけれど、いきなり職場でガーってゲロを吐く人はいない。大体、「きょうは気分が悪いので、お昼に退庁させてもらいます」と言って帰ってくれる。そういう意味では、理屈の通じない、とんでもない人と暮らし始めてしまったということで、職場のほうがどんなに楽かということがありました。

あと、「密室育児」と書きましたけれども…。妻は育児休業を取っているときは、中学・高校・大学のときに友達だった人が今お母さんで、ちょうど同じタイミングで育児をしているとか、産婦人科の病室で同じだった人とか、大体 10 人ぐらい友達がいて、その友達が行ったり来たりするのです。男性の私が育児休業を取って、そういう妻の友達とかとそんなに交流するわけにもなかなかいかなくて、本当に一人で、だれも話す相手がいませんでした。これは本当につらいことでした。

結局、私はどうなったかという、昼はテレビのワイドショーとかをつけて、ワイドショーのコメンテーターの発言に対してずっと反論するとか、そういうことをやり始めて。夜、妻が帰って来てカチャって玄関が開くと、玄関までこういうふうに行って、入って来る妻に対してダーっと、きょう1日あったことをしゃべる。そういう感じになってしまって…。自分でもちょっとおかしいと思うのだけれど、もう自分が抑えられないのです。だから、世の中でよく専業主婦はおしゃべりだとかと言いますが、それはそういうことではなくて、男性でも女性でもそういう環境に置かれたらそうなってしまうと思うのです。

仕事から離れるつらさもありました。私はそんなに仕事好きだとは思っていませんでした。育児休業を取って最初の2～3カ月は、毎晩毎晩仕事の夢を見るのです。電話したり、ワープロを打ったり、一生懸命仕事をしている夢を見るのです。それで、気がついたら赤ちゃんがギャーと泣いて、「うわー、またきょうも育児か」と思うと、本当に仕事で自己実現していたのだということがよくわかって、仕事から離れていることがこんなにつらいとは思いませんでした。

そんなこんなで、今申し上げたようなことは男性でも女性でも共通するつらさなのだと思いますけれど、これに加えて男性ならではのつらさもあります。それはどういうことかという、近所の人から好奇の目で見られることです。私は当時マンションに住んでいたのですけれど、マンションの管理人さんには、私が首になったと思われてもいけないので、「今は育児休業という制度があって、男性でも、仕事は休みますけれど首にはならず、また復帰して仕事ができるのです」ということをきちんと説明しておいたのです。

けれども、私が毎朝毎朝、赤ちゃんを連れて散歩に行くときに、管理人さんはいつも私に対して、「いいね、毎日休みで」と言うのです。もう、仕事よりもよほどつらいのにと思うのですけれど、管理人さんとけんかをしてもらくなことはないので、毎日「はあ」と言っていたのですけれど、毎日毎日、「いいね、毎日休みで」と言われるのは本当に心がつらかったです。

それからお医者さんです。子供が熱を出してお医者さんに連れて行っても、一言目には必ず、「きょうママはどうしたの？」と聞かれるのです。私もしょうがないから、「いや、この子は私が育てていまして」と言うと、お医者さんが「しまった」という顔をして目をそらすのです。それ以上何も聞いてくれないので、私もそれ以上説明できないのですけれど、そういうふうな好奇の目で見られるのは、物すごくつらいことでした。

「保育園からの疎外」とスライドに書いていますけれど…。赤ちゃんを保育園に連れて行っても、当時…今から16年前だと、送りもママ、迎えもママ、保育所のスタッフも女性ばかりということで…。唯一男性の用務員さんが一人いたのですけれど、全員女性のところに男性一人が入って行って子供の送り迎えをするのは、これも非常につらいことでした。

それから、「公園デビューの難しさ」と書きましたけれど…。子供を公園に連れて行くと、お母さんが輪になって楽しそうに談笑しているのです。私も入りたいのですけれど、なかなか勇気が出ないのです。しょうがないから、お母さんが談笑している周りを3メートルぐらい離れて、3周ぐらいして、それであきらめて帰って行くという…。そういう感じで、なかなかお母さんと友達になることもできません。結局、先ほど申し上げたように、男性の私には居場所や訪ね先がない。妻であれば10人から15人ぐらい友達がいたのだと思いますけれど、それがいないことが非常につらいことでした。

結果として、私は育児休業を取って2～3カ月ぐらいたったところで、最初は風邪をひいたのですけれど、風邪が治ってもベッドから出たくない。もちろん育児はやるのであるけれど、暇があればベッドで無

気力な状態になって、医師の診断を受けたわけではないけれど、「プチうつ」のような症状になってしまったこともありました。

では、どのように「プチうつ」から立ち直ったのかということですが、やはり一番大きかったのは、職場の先輩・友人・後輩からの励ましでした。

当時、私が本当に精神的に底だったときに、親しい先輩がメールをくれたのです。わずか4文字で、「最近どう」というメールだったのです。それをもらって、「ああ、おれはまだ忘れられていなかったんだ」と思ってすごくうれしくて、もうグッツとメールの返信を書き始めました。100行ぐらい書きました。近所のお母さん方の輪になかなか入れないとか、ワァーツと我慢できずに100行ぐらい書いて、こらえきれずに送信ボタンを押したら、先輩から返って来た返事が、「どうも煮詰まっているみたいだね」。それをきっかけに、その先輩と飲みに行ったりすることができました。

私の妻も偉かったと思うのは、私がそのように煮詰まっている状況を十分理解して、月に1回ぐらい酒を飲みを外出することを許してくれるようになりました。そういうことで、昔ながらの人間関係を確認することは、私にとっては立ち直る大いなるきっかけになりました。世の中のお母さん方で、月に1回旦那が早く帰って来て、「どうぞ、夜出かけてください」なんて言う人はあまりいないのかもしれませんが、私の場合は妻がそれを理解してくれていたのです、そういうことができました。

それから、「完璧主義からの決別」と書きましたけれど…。私は、仕事でも非常に厳しい完璧主義者であって、育児もきちんとしてやらなければという思いがあったのです。育児書を見ると、4カ月の赤ちゃんは大体こういうことができますよと書いてあるのですが、現実の子供は全然育児書どおりに発育しないのです。それで、何がおかしいのだろうか、と思ったりとか…。離乳食なんかでも、乳鉢ですりつぶせとか書いてあるわけです。でも、そんなことをやっている、こんな小さい離乳食をつくるのに、洗い物がこんなになってしまって大変だった。

私が「プチうつ」みたいになってしまったときに、介護業者の宣伝で「無理しない介護」という宣伝文句を見て、「そうだ、無理しない育児だ。大の大人がプチうつになってしまうのは少しおかしいぞ。もう少し肩の力を抜いたほうがいい」と思いまして、離乳食なんか完璧主義を目指すのをやめました。生協なんかで有機のニンジンすりおろしたペーストの冷凍を売っているのですが、それを御飯に入れて、「犬の御飯みたいな感じでいいや」と思ってつくると、グツと気持ちも楽になって…。子供も、乳鉢ですりおろしたものより、犬のご飯でいいやと思ってつくったもののほうが、パクパクパクよく食べてくれたりして。そういうことで、うつを脱却していった。

1年間の育児休業で、最初の半年は、正直つらいことのほうが多かったのですが、後半の半年に関しては、毎日毎日育児が楽しくて仕方がない——そんな感じにまでなってきました。父親の子育てをやられている方が皆さんおっしゃることは、やはり皆さん満足度が高いわけです。何の満足度が高いかというと、子供の成長が目に見える喜びということで、仕事とか、スポーツとか、学業とか、努力は、必ずしも結果に結びつかない場合が多いですが、子育てに関しては、自分の努力が子供の成長という形で、結構リターンが保証されているというか、かなり手ごたえがあるということです。

それから、子供を育てているわけですが、実は子育てを通じて自分が育てられているというか…。「無償の愛に気づく」と書いていますが、「この子のために自分の命を捨てられる」という精神状態に、子育てをしていると、ある日気がつくことがありました。双子のときには、自分は生物学的には父親になっていたかもしれないけれど、3番目の子供を育てるまでは、自分の命を捨ててまでこの子の命を

守りたいと正直思ったことはなかったのです。けれど、自分が子育てをすることによって、子供に対して無償の愛をささげることができるようになった。それは自分の成長だと思います。これは非常に満足度が高いです。

それから、「親子関係にいい影響」と書きましたけれども…。妻しか育児をしていないと、子供は妻に怒られたときに、怒るのも妻だけれど避難先も妻しかいないとなると、結局、きちんと怒れないということもあったわけです。でも、私が育児にかかわるようになってからは、妻が子供を注意したら、「パパー」と来るようになって、「おお、どうした、どうした、どうした。なに、なに、なに、どうしたの？」と…。大体最初は、自分は何も悪いことをしていないのにママがいきなり怒ったと言うのですけれど、「そんなことはないんじゃないかな？ 何かないの？」と言ったら、大体 30 秒後には自白して、「ああ、それだったらママに謝りに行こうね」という感じで連れて行くのです。

私が怒ったら妻のところに「ママー」って叫んで、妻が怒ったら私のほうに「パパー」って来るようになって、叱り役と保護する人間が分かれているという意味で、親子関係にも非常にいい影響があったと思います。

それから、地域社会とのつながりもできまして。育児休業を取った1年後には、私のほうが妻よりも、近所を歩いていて知り合いが多いという状態になるわけです。

翻って、職場が特殊な社会だという自覚も持つようになりました。これは、霞ヶ関で每晚3時～4時まで働いて法律とかをつくっていると、「おれの法律は、すげえんだ」とか思うわけです。そういうふうに自分を鼓舞しないと、なかなか精神的な平静も保てないぐらい過酷な職場なんです。そういうことを思っていたわけですが、実際に保育所なんかで子供のお母さんなんかとしゃべると、別に霞ヶ関の法律なんて何も関係ないわけです。ということを見ると、おれって何かカルト集団の中でマインドコントロールされているんだと思うようになって、職場が逆に客観視できるようになって、それもよかったと思いました。

要は、サービスの受け手の側がどういうふうに行行政サービスを受け取っているのかということ、受け手の側からとらえ直すことができるという意味で、5番もよかったです。

それから一番よかったのは、夫婦間のコミュニケーションの改善ということで、家事・育児の価値ということ。次の表で示しますが、結局、私は妻に対してエチケットとして、妻が双子の育児休業を取って育児をやっていたときは、毎晩帰って来ると、「お疲れ様」とか、「きょうも大変だったね」と、口先では言っていたわけです。エチケットとして。でも、それがどんなに大変かということ知らなくて、口先だけで言っていたのですけれど、自分がやるようになると、当然それがどんなに大変かがわかったうえで、夫婦の分担を変えることになったわけです。

私は今でも覚えています。育児休業を取ったのは11月なのですが、春の4月ぐらいですかね、たまたま妻が早退して帰って来てくれた日があって、桜並木のカフェかなんかで子供と妻と座ってゆっくりする時間があったのです。そのときに私が、「いやー、こんなに大変だとは思わなかったよ」とカミさんに言ったら、カミさんがボロボロボロボロ涙を流しはじめて、「ようやくわかったか！」と言うのです。それで、そのときにようやく私を許してくれたということがあって、夫婦間のコミュニケーションは、私が育児休業を取って非常によくなったと思います。

これは、「子供が生まれる前の家事量を 10 とする」と書きましたけれども、子供が生まれる前の家事量なんて本当に少ないわけです。私たち夫婦は共稼ぎで、同期なので、5:5の分担比率でやってい

ました。現実には理想とする家事のレベルが違っていき、僕がよく言っていたのは、「君が必要だと思うなら、それは君がやってくださいよ」ということでした。現実には、夫が満足する家事の水準と妻の満足する家事の水準が違うので、私が満足する水準の半分ぐらいやりましょうということで、5:5が現実には3:7。これが率直なところでした。

私は、「別に洗濯物が1週間積み上がっていき、全然おれは気にならないけれどな」とか、「床にほこりが落ちていき、別にそれを見なきゃいいんだろ」とか、そういうことを言っていて、なるべく合理化・合理化しようとしていたのです。でも子供が生まれると、床にほこりが落ちていき構わないだろうとは言えなくなるわけです。赤ちゃんがベロベロベロベロ床をなめて這いずり回るので、やはり掃除をしなくちゃいけないということになって、子供が生まれると必要な家事量の10が100ぐらいになります。それって必要ですかということ、子供の健康を考えるとナンセンスで、双子育児のころは、今にして思うと、子供がいない間は3:7の育児だったのが、総体は100になるので、10:90ぐらいになっていたと思うのです。

私は、夜中に帰って来たら、皿洗いとかそういうことをやって10やっていき、私のセリフとしては、「おれ、今までの3倍以上やっているのに、なんか知らないけれど妻がブリブリ怒っているぞ。なんなんだ」と思っていたのですが、妻の側からしてみたら、「あんたは100の必要家事量の全貌を理解していなくて、以前にも増して家事をやらなくなった。1割しかやらなくなった」と怒っていた。これが双子の育児のころの、私と妻の間隙の原因だったということ、100家事量があるということを私が実感して、初めてこの構造に気がついたのです。

育児休業を取ったあとの家事分担は、私が育休を取って、当然その間は家事・育児の最終責任者だったので、はじめて100あることを実感して、それで50:50の分担をしましょうということにしました。もちろん、総量を減らさないといけないので、合理化できるところは合理化するということですが、私と妻の間に「洗濯論争」というものがありまして…。今は洗濯乾燥機が出ているわけですが、妻は、「洗濯の途中でちゃんと1回とめて、赤ちゃんのものは出して干しなさい」と…。浴室の乾燥機で干せと言うのですが、「せっかく文明の利器があるのに、途中でとめるなんておれは絶対我慢できない」と言って、結局、私と妻の間で手打ちをしたのは、赤ちゃんにはワンサイズ大きい服を買うこと。タンブラーで回して縮んでもいいように、ワンサイズ大きいものを買おうということで、何とか手打ちをしました。

それから、機械化できることは機械化ということで、洗濯機もそうだし、食器洗い機もそうだし、当時ルンバというものが出たころだったので、そういうものもどんどん購入しました。結局、二人とも家事・育児ができると、何も言わずにアイコンタクトすらなく、お互いに相手がどんな家事をやっているのかということ、理解しながら、二人で坦々と家事を片づけるようになりました。例えて言うと、私がボールをゴール前に蹴り出したら、妻が走って来てシュートをする——そういう感じで、家事ができるようになったということです。

それで、1年間の育児休業が終わって職場に復帰しました。私たち夫婦は、復帰したあとも3歳の双子と1歳の子供だったので、当然大変でした。それで私自身は、水曜日と金曜日の定時退庁日に早く帰してもらうこと、月・火・木は妻が早く帰るという形で、「育ボスに上手に甘える」と書きましたけれど、定時退庁日だから早く帰らせてくれとは、なかなか言いにくいのですが、とにかく上司に、「いや、もう本当にこうじゃないと家が回りません」と言って、上司の男気をうまく利用してそういうふう

やった。

周辺にも変化は発生して、経産省でも、私のあとに育児休業を取った人は何人も出ていますし、各省もどんどん出ています。育児休業もちろん出ていますけれど、それ以外もありました。私の同僚で、隣に座っていた課長補佐が、赤ちゃんの発熱が理由で3日連続職場を休んでいて、「どうして3日連続この人なのかな？」と夫婦で思ったのですが、その人から言わせると、「妻が育児休業を取って、今は育児休業明けで戻ったタイミングだからなかなか休みづらいので、ここは私が取っています」と…そういう人も出てきました。配属先にも工夫をしてもらって、最初は暇なところに戻してもらったのですが、子供の成長に応じてだんだん負荷がかかってきたという感じです。

それで、横浜市の副市長になったということで、最初はちゃんと働かなければということだったのですが、早く帰らないと子供たちが、「パパがいなくなった」と叫ぶようになったので、林文子市長にお願いして、水・金は早く帰ることにしました。そして、2012年の4月からは夫婦とも霞ヶ関の管理職になっていて、今でもこの状態が続いているということです。

山田家流の、仕事と育児との両立のヒントです。職場が悪いとか、自治体が悪いとか、国が悪いとか言う人はいっぱいいるのですが、私は、最も頼るべきは配偶者だと思っていて、配偶者が頼りになれば、ほとんどの問題は解決するのではないかとということです。周りの人に、「山田さんは、いつ残業できないかわからない」ということでは困るので、妻と私で手分けをして周りに意識させて、「きょうは水曜日なので申しわけありません」とか言って、なんとかしのいだということです。

二人とも絶対に休めないということは、実はそうそうないわけなのです。ですから、私どもはLINEで、LINEが出る前はCメールとかそういうもので、とにかくこの時間帯は休めないということが決まったら必ずお互いに連絡して、相手が休めないときには、反対側は休めない用事は入れないということをしていました。夫がいつ休めないかわからないということだと、常にプレッシャーは妻にくるわけですが、夫婦とも絶対に休めないという状況を回避しておく、妻の負担は非常に楽になると思いました。

育児休業の経験が仕事にもたらした六つのメリット。「仕事の能率の向上」。これは率直に申し上げて、育児のほうをはるかに大変です。職場に戻ったら、職場は随分ゆったりしていると思えました。なぜならば、仕事は定期的というか、きちんと秩序立って組み立てられるのです。育児でよくあったのは、ハンバーグを焼いていると、下の子が寄って来て、「ミルク、ミルク、お父さん」と言っているところに、何か一番下の子がうんこを漏らしたみたいなぶーんという臭いがしてきたところで、宅急便のベルが鳴るとかです。その瞬間、何をどう優先するのかということを瞬時に計算して順番を決める。このやり方が合理的だということを瞬時、瞬時に判断していたら、物すごく疲れたわけですが、それに比べると仕事は、はるかに秩序立っているということです。

それから、「むだな仕事を合理化する努力」ということです。早く帰りたいので、むだな仕事は徹底的にやめるということ。それから、「自分の仕事を客観視できる」。保育園のママ友が見たら、おれの仕事はどういうふうに見えるのかということが見えるようになりました。

それから、「部下に対する心の余裕」ということ。私は結構、仕事はもともと完璧主義者で、物すごく自分にも厳しいけれど、部下にも厳しかったのです。けれども育児休業を明けたあとは、新入社員が変な紙を持って来ても、「ああ、この人の20年前は、お父さんお母さんはどういう気持ちだったのかな」と思うと、それまでは90点の紙を持って来ても100点まで厳しく指導をしていたのですが、30点の紙を持って来られても何かお父さんの顔がよぎるようになって、じゃあ40点に向けて頑張ってみよ

うかという感じで、随分マネジメントでは余裕が出るようになりました。組織に対するロイヤリティも上がって、広い意味での人生全体で育児休業はプラスだったわけですが、仕事の面でもプラスだったと思います。

社会実験の結論です。男でも、子育ては全く問題ないです。「パッ、パッ、パッ、パパ」というのが、うちの第3子の第一声になりました。今でも、パパと一緒に寝る子に育っています。唯一の例外は、初乳という、母乳の最初の栄養価のあるものです。それは育児休業でなくて産後休暇時にあげられますので、全く問題ない。結局のところ、男性でも女性でも、子育ての得意な人もいれば苦手な人もいる、それだけのことだと思います。

その後の山田家ということで、ようやく2番目の話題になりますけれども…。今、高3の双子と高1の男子がいて、結構大変といえば大変です。「小1プロブレム」というものがまずありまして、小学校に上がったタイミングは、保育所はそれまで7時半まで預かってくれていたわけですが、6時過ぎで放り出されるので、小1プロブレムというものがありません。ただ、このタイミングで山田家は二世帯住宅に妻の実家を改装して、おじいちゃん・おばあちゃんと住むようになったので、小1プロブレムは回避しました。次に、「小4プロブレム」というものがあります。これは学童が小3までなので、小4になると、それこそ午後3時に放り出されてしまう問題ということです。これは、学習塾に入れることで回避しました。学習塾を学童代わりでしたということです。

物理的には、当然子供が大きくなるにつれて手は離れていくわけですが、精神的には非常に手のかかる子供が多くて、逆にいじめとか、勉強とか、そういう問題があったので、負荷はそんなに変わっていないと思います。うちの子は非常に男女共同参画的な価値観を持っていて、先ほどのゼミでも少し申し上げましたけれど、夫婦が対等で家事をやっていると、子供も当然のことながら男女共同参画的な価値観を持つようになっていて、家族でお友達の家遊びに行ったときに、お母さんしか台所に立っていないと、うちの娘がツカツカツと台所に行って、「どうしてこの家は女だけが台所にいるんだ？」と。そういうことを叫んだこともあったりして、やっぱり結構、親の影響を受ける。課題は食育と勉強だと思っていました。少なくとも夫婦どちらかは、一緒に食卓を囲むようにしています。

私が育児休業を取った2003年～2004年は、男性の育児休業がほとんどなかったわけですし、少子化の原因ともあまり認識されていなかったのかもしれませんが。その後、男性が育児をやらないことが少子化の原因になっているのではないかとということで、年々政策的な重要性が増してきて、野田総理の時代には、こうやって官邸に呼んでもらって、政府も育メンを推奨するということになっています。もちろん安倍政権になっても、安倍さんには呼んでもらってはいませんが、女性の活躍推進とか男性の育児休業とかは、一貫して政府が力を入れるアジェンダになっています。菅政権になっても、菅総理自身が男性の育児休業について言及されています。

少しマクロの数字も追いかけていきます。男性の育児休業取得率は、私が育児休業を取ったころは0.33%とか、そういう数字だったので、今は伸びたとはいえ3.16%です。直近は7とかいう数字を見ました。少しは伸びてはきているのですが、政府の目標自体は2025年30%ということから考えると、まだまだ一桁なのでごく少ない数字ではあるということです。大体、政府目標というのは、2025年30%と言っても、2025年になる前に新しい目標で先延ばしして、少しパーセントを上げるというのが政府のやり方で、どこまで行っても追いつかない蜃気楼みたいなものがよくあるパターンです。この政府目標もそうですけれど、一応今は30%ということになっています。

なかなかふえないのですけれど、世の中はだんだん変わってきています。専業主婦家庭は減っていて、共稼ぎはふえているので、そういう意味では、共稼ぎであればお互い働くのだから、「家事・育児もお互いやりましょう」というのが当然の世の中に、だんだん変わってきているのかと思います。

やはり難しいのは職場の上司で、これは10年ぐらい前に亡くなられた御船先生からいただいたファイルで、今でも愛用しているものです。横軸が時代で、縦軸が年齢でして、私が育児休業を取ったころは、ピンク色の世代がまだ上司だったわけです。そうだとすると、この人たちが若いころどういう教育を受けたかという、性別役割分業ということで、配偶者控除ができるとか、高校の家庭科は女子だけが学ぶとか、そういう時代に価値観を若くして植えつけられた人がちょうど上司になっている。こういう上司が理解しないから、若い人たちは育児休業を取ろうとしても、取れなかったということなのです。

そこから時代を経て、今このピンク色の人ほとんど退場している。そういう意味では、男女共同参画的な価値観を持った人が、だんだん企業の幹部・組織の幹部になられているということで、状況は変わってはきているのですけれど、変わるスピードは、このスピードでしか変わらないということです。

その結果、起きていることが日本の男性の家事・育児時間の少なさです。これは最新の数字ではないのですけれど、最新の数字もほとんど変わらないので、古いものを持ってきています。女性が7時間、家事・育児をやるのに、男性は1時間10分ぐらいしかやっていないということです。諸外国も男女差はあるのですけれど、日本ほど極端に差がある国はないということです。しわ寄せが母親に寄っているので、育児負担が多くて、その結果産まないということが出ている。その結果が少子化で、第一次ベビーブームがここにあって、第二次ベビーブームがあつたら、本当は第三次ベビーブームがなければいけないのですけれど、ないままにダラダラと出生数は下がっているということです。

以上が、育児休業の経験およびその経験談です。

きょう、もう一つお話のリクエストがありましたのが、消費者庁での挫折ということです。冒頭申し上げましたけれど、私は一度、原子力の核燃料サイクルで勝負して負けていまして、その後、育児休業を取って、その勝負はもしかしたら勝ったのかもしれませんが。そのあと消費者庁というところに行きまして、取引対策課長というポストに就きました。そこで特定商取引法の改正という検討をしたのですけれど、この不招請勧誘という簡単に言うと、訪問販売でコンコンコンと家を訪ねたりとか、突然、家に電話がかかってきたりとかで営業されてしまう…生活の平穩が乱されて、あれは嫌じゃないですか。私が育児休業を取っているときも、せっかく子供が寝たのに、新聞の勧誘員が来て赤ちゃんが起きてしまったという経験もありました。

今は、お年寄りが家にいることが多くて、そういう人たちがこの不招請勧誘で、突然来たセールスマンに変な物を買わされるとか、そういう被害が非常に多かったので、不招請勧誘規制の検討を始めました。そのときに、日本では新聞の政治力は物すごく強いわけですが、日本で最大の部数を誇る新聞社のお偉いさんが、ある日私のところに来まして、「これはうちの会長の最大関心事です」と言いに来たのです。私も、「そんなことを言われても、こんなに苦情件数が来ていますよ」と…。今は少し減りました、その後少し減っています。当時は年間1万件ぐらい新聞の苦情がありました。全体の苦情は96万件ですが、新聞は圧倒的に1位で、その会社が社別では圧倒的に1位だったのです。

この数字が減れば、規制しないことはあり得るけれど、国民の98%が規制を求めているという。これは珍しい、だれしものが望んでいた規制なので、「老人の被害も多いので、被害がなくなるとやらざる

を得ませんね」と言ってお引き取りいただいたのです。だんだんいろいろなことが起きるようになりまして、新聞の販売店の方々の集まりなんかにも呼ばれるようになったのですが、私はそこでもどこ吹く風でいたのです。消費者庁も、長官とか審議官とかが怖がり始めまして、「山田くん、どうするの?」、「いや、官邸にとめられるのならやめましょう。官邸にとめられるまでやらせてください」と言っていたら、ある日突然、異動になったということです。

結局この法改正は、私は道半ばで後任に譲り、当然、不招請勧誘規制も導入されなかったわけですが、世の中は正しいことを言っているだけでは動かないこともあるということに気がつきました。

それで最後に、「前例を創る」と書きました。国家公務員というのは非常に恵まれた立場で、法律上身分保障があるという意味で、首にならないのです。政治家は次の選挙を意識した判断をせざるを得ないので、新聞販売店に言われれば、この人を異動させようということになるわけですが、役人は身分保障があるからこそ、短期的なポピュリズムにとられることなく、長期的な展望で、国にとって正しいことを追求できると思っています。それで、法律の仕組みとして身分保障があるということは、政治家に対して正々堂々と正論を主張することが期待されていると私は理解しておりまして、短期的な視野で動く民主主義と、それに対峙する形で、長期的に正しいことを言うことが自分の役割だと思って今まで暮らしてきました。

でも、やはり政治家ににらまれると左遷されるわけです。私は何回も経験済みです。実はもう1回ありまして、3回左遷されているのです。でも、命が取られるわけでもないし、首にならないわけです。私がよく思ったのは、「これが戦国時代だったら切腹斬首だな。ああ、よかった。今回も命を取られたわけじゃない」と——自分が左遷されたときには、いつもそういうふうに慰めていました。案外、周りの人は見ていてくれて、ほとぼりが冷めたら、またチャンスを与えることもある。そうでないときもあるのですけれど…。でも、そういうことを期待しているにつらいので、期待はしないけれど、割とそういうことはあると思います。

私は、最初に左遷されたときには、机の上に広田弘毅の「風車 風が吹くまで 昼寝かな」という歌を貼っていたのです。広田弘毅は後に総理大臣に戦前になりましたけれど、左遷されたときがあつて、そのときにこういう句を読んでいまして、「天が自分を必要とすれば必ずチャンスが来るし、来なければ、自分はその程度」と割り切るということで、精神衛生上整理をしておりまして。

とにかく、私の行政スタイルは理想を高く掲げるといって、これも育児休業を取ったことが経験しているのかもしれませんが、「自分の子供にちゃんと語れる仕事をしよう」というのが、私の仕事に取り組むスタンスです。嫌いな言葉は、「落としどころ」という言葉です。逆にいっぱいいるのです。落としどころはどこかと言って、足して2で割って、そこに走って行くようなやつはいっぱいいて…。そういう人たちは周りをキョロキョロ見て、摩擦が生じない範囲でしか仕事をしないから、結局それは世の中を変えたことにはなっていないのですけれど、そういう人たちがいるわけです。

私のモットーは、「できるまでやればできる」「できるまでやらないからできない」ということです。一歩間違えれば奈落の底ですけど、私としてはそういう志で仕事をしてきたということを最後に申し上げて…。すいません、バランスが随分悪かったかもしれませんが、そういうことで、きょうのお話をいったんここで締めさせていただきます。あとは質疑応答を受けたいと思います。

○ゆき ありがとうございます。みんな、来てよかったと思うでしょう? うなずいておられます。

では、巨匠にカメラお願いして。マイク係をまたカズさんをお願いして…。

○男性 ちょっと遠慮気味にしようかと思ったのですが、聞きたいことがいっぱいあったので…。

この「職場で、前例を創る」というところにとっても感動しました。法律上、首にはならない。だからやっていこうという、そこはすごいなと思いました。

質問としては——質問にしないといけないので質問なのですが、こんなことを考えている人は、役所の中では多分いないと思うのです。何パーセントぐらいの人がこういうことを、山田さんみたいなことを考えるのでしょうか？ つまり、この国が変わっていくためには多数派にならないと難しいでしょうけれど、きっと少ないだろうと思うのです。

たまたまですけど、テリー伊藤が書いた『大蔵省の官僚の人たちの本音を聞く』という本を半年前に見て、びっくりしたのです。みんな仕事人間だったし、自分が一番偉いと思っている、そういう役人・官僚の人たちがほとんどなのかと思っていた。きょう、山田さんの話の中でちょっと意外だったのが、昔の先輩からつながっていたというところで、すごくホッとしているどころか逆にびっくりしたのです。だから質問としては、山田さんの志といいますか、考え方というのは本当にすばらしく応援したいのですが、現実としては何パーセントぐらいの人がいるのかということ、あえて数値的に教えていただきたい。

○山田 ありがとうございます。本当に魂を売り渡して、政治家の機嫌だけ取ってうまく泳いでいこうみたいな…本当に魂を売り渡している人はそんなに多くはなくて、マジョリティは、良心の呵責を感じながらもそういう人に引きずられて、自分も弱いから引きずられてしまうという人がマジョリティなのかと思います。

私みたいな人が何パーセントいるかはよくわかりませんが、1割ぐらいはいるのかとも思いますけれど、1割もないかもしれません。結局、これもすごく夫婦のあり方と関係していて、先輩とかで毅然として正論を言う人は、多くの場合は夫婦とも働いている。だから、私も妻と子供を全員養わないといけないという立場に置かれると、もしかすと今ほどは強くはなかったのかもしれないと思います。

だから、先輩とのつながりを確認できてうれしかったということも私の弱さのあらわれだと思いますし、そんなに人間一人で強くいられるわけでもないと思いますけれども、感覚的には1割かなという感じがいたします。

悪いことに手を染めていても、これは正しい意味があるのだと思い込みがちになるのです、人間は弱いから…。悪いことに手を染めていても、一生懸命に合理化しようとするのだけれど、合理化しきれない。でも、一生懸命に合理化しようとする…そういう人が大半だと思います。

○原 原です。きょうはどうもありがとうございました。

育休は1年でよかったと思いますか？ それとも専業主婦になって、ずっと子供の成長・発達を見続けたかったと思いますか？

○山田 ありがとうございます。1年間の育児休業を終えるときには、職場に戻るのが憂鬱で仕方がなかったのです。けれど戻ってみると、それはそれで自分の視野も広がるし、私の場合は、幸い妻も私も分担してやれていますから育児も回りますので、今にして思えば仕事を続けてよかったとは思っていま

すけれど、その瞬間は、スナップショットで撮ると、非常に戻ることが憂鬱でした。

○原 ありがとうございます。

○男性 つまらないことですが、ユキさんが、「古本で、1円で買っていい」と言ったのですけれど、やはりキンドル版で買わないとお金が山田さんに入りませんので、皆さんキンドル版で買っていただきたいと思います。つまらないことですが…。

○女性 本当にきょう、ナマで聞いてよかったですと思います。何か伝わってきました。

お母様方と一緒に、政策があまり効いていないとか、そういった立場でも見られるようになったということですが、子育てをされている中で、こういう施策が必要だと強く思われたこと、そこで気づいた役人としてなすべきこと、新たに気づいたことがもしあれば教えてください。

○山田 ありがとうございます。私は、そのあと横浜市役所に行って、林文子市長のもとで「待機児童ゼロ作戦」ということをやったわけですが、育児休業を取っているときにいろいろな子育てをしている人とかかわる中で、やはりどうしても国とかは労働参加もふやしたいし、保育のところに寄っていくわけです。子育てがづらいのは、働いている親だけでなく、むしろ専業主婦の人のほうが息が詰まっている感がありました。職場に行ったら、職場では仕事をやって、ある種リフレッシュしている部分もある。専業主婦の人たちも同じように、あるいはそれ以上につらいのだと思いました。

それで、横浜市で「びーのびーの」という——奥山千鶴子さんという人が最初のきっかけをつくられた方なのですが——子育て支援拠点というか、子供をお母さん方・お父さん方が連れて行って、子供を置いて、そこでみんなと談笑をするような“居場所事業”というものがあまして。これは、そこに子供を連れて行って仲間と話すと、魂が救われるというすばらしい場なのです。これは特定の人だけが被益する保育事業だけではなくて、すべての親が被益する子育て支援拠点も、ちゃんと18区でつくっていかないといけないということで、18区全部につくらせていただいたのです。それは、私が自分の育児休業の経験があったからこそ主導できたのかとも思っています。

○ゆき ありがとうございます。考えがまとまりましたか、瑠美さん？

○藤原 どうしても自分の意見を言ってしまう感じになってしまうのですけれど…。やはり、先生の御家庭のように、妻も夫も働いて、二人で子育てしながら、二人で仕事でも成長していくというのが一番の理想かなと、お話を聞いていて思ったのですけれど…。どうして日本はなかなか難しいのでしょうか？どこから手をつけていったらいいのかなと思うのですけれど、でも大分変わってきたような気がするのです。家のすぐ裏に保育園ができたのですけれど、結構お父さんが連れて来ることもあるのです。実際ふたを開けてみると、お料理が男性は割とできないことが多いのですけれど…。

そうだ、思い出した。先生は、お料理はどうなのでしょう？ お料理というか、食事は奥様のほうがおいしくつくられるのでしょうか？

○山田 ありがとうございます。私は、実は中学3年から一人暮らしをしまして…。というのは、親が転勤で東京に戻って来て、私は地方の6年間一貫の学校だったのです。だから、そういう意味では、私は一通りできまして、実は料理は私のほうがうまかったのです。コロナが起きて、テレワークで家にいるようになったときに、妻が俄然と目覚めて、料理をやり始めて、今は逆転されていて僕は少し焦っているところなのです。でも、妻が料理をするようになったということだけにおいては、私はコロナには感謝しております。

ちょっとおっしゃられた、世の中どうなったらそういう夫婦がふえるのかという御質問に対しては、いみじくもおっしゃられたように、今は本当にそういう若いカップルがどんどんふえていますよね。ですから私は、先行きは不安に思いません。

○藤原 先生がすごくいいロールモデルだと思うのです。とても格好いいロールモデルがあると、どんどんふえていくので、これはいいなと思いながら伺いました。昭和 22 年生まれの私の世代だと…。私は 53 歳で結婚したのですが、そのとき夫が 11 歳年上で、夕飯をかわりばんこにつくろうと提案したら、どうしてもできないと言われて、朝御飯ならできると言って、後片づけまで 10 年間ぐらいやってくれたのです。けれども、そのうちにレビー小体認知症になってしまって、それができなくなってきたのです。

やはり二人でつくっていく家庭は、役割分担の家庭よりもずっと豊かなのかと思って、ポストコロナの時代は、生活をいかに楽しみながら仕事もいい仕事をしていくことかな——なんて、すぐ意見を言うのですが、そんな感じがします。先生のお話を伺っているとそのように思ったので、すばらしいなと思いました。

○山田 ありがとうございます。

○ゆき ありがとうございます。では、カズ先生から締めのお言葉など…。

○丸木 何か、一番コメントしたくないテーマなのですが…。

きょうは、ありがとうございました。私は団塊世代で、全然育メンではない…逆育メンは何て言うのですかね。一切、子供の教育・子育てにタッチせずに、娘から嫌われ、でも破綻したわけではなく、孫もあまりかわいがらないものですから、孫も「じいちゃん」と近寄って来なかったというか、今も来ないという、すごく不幸なあれで…。やはり子育てをしないから、こういう喜びを全然感じなかったのだなと思って、きょうお話を聞いて、これは天罰だというのが正直、私のきょうの素直な感じなのです。

やはり、そういうことをやった人でないと、どうしたかわからないということがしみじみわかりました。というのは、職場の上司として、「おい、おまえ育休、本当に取るのかよ」という立場にいた人間としては、きょうのお話をお聞きして、こういういいところがあるのだということを具体的に、またユーモアたっぷりにお話ししていただきました。ホクのような頭のかたい人間でもきょうのようなお話を聞いたら、少しは考え直すのかなというのが、きょうの私の素直なあれでして。本当にきょうは、どうもありがとうございました。

○山田 ありがとうございます。

○ゆき 丸木教授の懺悔のお言葉でございました。

ちょうど時間になってしまいましたので、万雷の拍手で、お礼をあらわしてくださいませ。